

学校自慢

地域社会と連携した ふるさとの森再生プロジェクト

野田市立柳沢小学校校長 えんどう えみこ
遠藤 恵美子



1 はじめに

二度目の着任である。教頭時代には伝統芸能「野田踊り・野田小唄」の伝承、米作りや餅つき体験、地域のお年寄りとの昔遊びなど、つながりに感謝しつつ過ごした。再びの本校は変わらず温かく、しかし新たなプロジェクトを模索している、そんな時期であった。

2 地域連携の「市民の森」保全活動

本校に隣接する西山の森は、その昔、お社や自然湧水を利用した田んぼがあり、住民が総出で池の落ち葉をさらい、子供たちが水浴びをする、そんな憩いの場所だったという。しかし、私の知る森はお社も壊れ、管理が行き届かず鬱蒼としていて「怖い森」「行ってはいけない場所」となっていた。「西山市民の森」と位置づけられたことを契機に、森を再生すべく地域団体や住民と協働で取り組むこととなった。立ち上がったのは5年生。令和5年度はその2年目であった。

3 先輩からのバトンを引き継いで

「安心して行ける自分たちの森に」そんな先輩たちの願いを受けて活動は続けられた。地域の方々とともに森の清掃から着手。50人ほどの方が集まり、力を合わせて土や川に埋まったゴミを掘り上げる。自転車、掃除機、タイヤ、魔法瓶……。森に光が当たるようにチェーンソーで樹木を伐採。川の向こう側に行きたいという子供たちの願いが聞き届けられ、橋も架けてもらった。子供たちは親しみやすい森になるよう、間伐材を利用してベンチやキャラクターなどを制作して設置した。

「子供たちがゴミを拾っても、捨てる大人がいる！」とポスターで呼びかけ、自然保護に関心のある大人たちへ向けてプレゼンテーションをしたり、どのような森を目指すか市行政へ要望を行ったりもした。生物多様性について学び、生き物が住みやすい森作りが自分たちの未来を守ることにつながることを知り、枯れかかった自然湧水の復活が懸案となった。

4 持続可能なプロジェクトとするために

令和6年度、手入れが行き届いた他の市民の森を見学し、自分たちの森が荒れてはいるものの、他にはない良さがあることを発見した。「蛍が飛び交う森に」という将来の目標を定め、専門家を招き水質調査を実施。自分たちの活動により環境はどう変化するか、「植生を調べたい」という声を受けて定点観察をどうするか、野田市のみどりと水のまちづくり課と連携して進めていく計画である。

5 今後の展望

早朝、耳を澄ますとたくさんの野鳥の声が聞こえてくる。西山市民の森は30種類以上の野鳥が訪れる野鳥の森でもあるという。子供たちが作ったベンチにお年寄りが腰掛けている姿を見ると、心がふんわりと温かくなる。森が憩いの場所となれるだろうか。子供たちの「好き」や「興味関心」を出発点に、地域社会の課題とつながる自分なりの問いを設定し、解決に向けた実践を重ね試行錯誤する。「ぼくらは地域を変える力を持っている」と当事者意識を持って、「関わる人」となってもらいたいと願っている。